

2021年11月14日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書2章13～17節

説教題：恵みへの招き

「愛する人が襲われたら」という本の中にこんな話があります。日本で合気道を学んでいるアメリカ人の青年が電車に乗っていると、酒の臭いをプンプンさせた酔っ払いが乗って来ました。赤ちゃんを抱いている女性にはぶつかり、怖がって逃げようとしたお婆さんには蹴りを入れようとしてしました。青年は、今こそ合気道を使って世のため人のため、酔っ払いをとっちめてやろうと立ち上がりました。その瞬間、酔っ払いに向かって「よう!」と声をかけるお爺さんがいました。お爺さんは、酔っ払いに上手に話しかけ、彼の身の上話を引き出すのです。酔っ払いは、涙を流しながら自分の辛い状況を話し、お爺さんがそれを受け止めて上げると、お爺さんに心を開いて、ついにはお爺さんのひざに頭をもたせかけるのです。その様子を見て、青年は自分の未熟さをしみじみ反省する、という話です。この話は「人は自分を理解してくれる人をどんなに切実に必要としているか」ということを教えます。私の中でこの話と今日のレビの話とが重なったのです。

今日の箇所は、金持ちだったであろう取税人レビが、イエス様の招きに応じて、生活の資を捨ててイエス様の弟子になる様子を描きます。失ったものは大きかったでしょう。なぜ彼は、イエスの招きに応えたのでしょうか。私は、この箇所は、レビの姿を通してキリスト教信仰の恵みについて教えてくれる箇所だと思います。2つのことを申し上げます。

### 1：キリスト教信仰は招きに始まる

レビは、カペナウムの町で取税人をしていました。当時のカペナウムは、国境に位置する町でした。そこには収税所(税関)があって、レビはそこで働く取税人でした。当時の取税人は、その仕事のために人々から嫌われていました。特に宗教のリーダー達は「お前達のような者がいるから国が祝されないのだ」と毛嫌いしていました。レビも、そのような軽蔑の視線、冷たい視線に絶えるような生活を送っていたと思います。そのカペナウムは、イエス様が伝道の拠点に定めておられた町でもありました。イエス様は、会堂がイエス様に扉を閉ざし始めていたのでしょうか、時に湖畔で、時に丘の上で、人々に教えられました。説教を終えて、その日の宿を求めてカペナウムに帰って来られる途中に、収税所にいるレビを見られたのかも知れません。レビに向かって言われるのです。「わたしについて来なさい」(14)。この一言で、レビは全てを置いてイエス様に従って行くのです。

「なぜイエスは、レビを召されたのか、なぜレビが、この一言でイエス様に従ったのか」、ここには何も書いてありません。おそらくレビは、イエス様がどこかで話しておられるのを既に聞いていたのだらうと思います。「ルカ18章」でイエスは譬え話をしておられます。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します…』。ところが、取税人は遠く離れて立ち…自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください』。あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません…だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです」(ルカ18:10～14)。イエスは、色々な場所で同じ話をされたでしょうから、レビもこの話を聞いていたかも知れません。そうだとしたら、レビは「この人なら取税人である私をも受け入れる人に違いない」と、イエス様の中に「人生の導き主」としての光を見ていたということは考えられます。しかし、マルコはそんなことを長々と述べない。イエス様が「わたしについて来なさい」と言われ、その一言で彼は立ち上がってイエス様に従うようになった、それだけ書きました。申し上げたように、レビにはレビの

心のドラマがあったと思います。しかしそれでも、自分がイエス様の弟子になる物語は、突き詰めれば、イエス様が自分を招かれた、それで全てだったのではないのでしょうか。

私は「キリスト教信仰は招きで始まる」ということを思うのです。皆様、お1人びとりが、それぞれ違う道筋でキリスト者になられたでしょうし、これからなられることでしょう。誰1人として同じ人はいない。しかし共通しているのは、『『キリスト者になろう』と行って生まれて来る人はいない』ということです。人生のどこかの時点で—(それほどどこか一点ではなくて継続する期間かも知れませんが)—「神様を信じよう」と思う状況が出て来るのです。問題の中で教会に導かれたり、キリスト教を勧める人があったり、誰かの影響で教会に行くようになったり…。子供の頃にキリスト教に触れる機会があった、という方もおられるでしょう。様々だと思います。しかし、それは自分で造った状況ではない。神様を信じるようになる状況が、私達の回りに置かれるのです。それが神様の私達に対する「招き」なのです。今神を求め、神を見上げておられる全ての方が、1人残らず神様に招かれたのです。そうでなければ、キリスト教が圧倒的少数派の日本で、私達が神を求め、神を見上げるようにはなっていない、と思います。

ある時、私はある姉妹と洗礼準備会をしていました。その姉妹がご自分の色々な思いを分かち合ってから下された後、「こんな私がクリスチャンになって良いのでしょうか」と言われました。私はイエス様の御言葉を紹介しました。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです」(ヨハネ 15:16)。イエスはこうも言っておられます。「父のみこころによるのでないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできない」(ヨハネ 6:65)。神があなたを選んで招かれたのだと、お話ししたことでした。実感のない話です。しかしイエス様がそう教えて下さるし、この個所もそのことを教えるのです。

私にも教会に繋がるようになった道筋があります。しかし「なぜ、私は神様を信じるようになったのか」、突き詰めて考えてみれば、神が招いて下さったから、それ以外に考えられないのです。人が信仰者になって行く理由、それは、その人が必死になって神にしがみついたからではないのです。まず神が招き、身許に引き寄せて下さったからです。私達の側の動機が大切なのではない。いや、それも大切でしょう。しかし、私達の信仰生活の大前提は、私達は神様に招かれた、ということです。私達は、そこに信仰生活の根拠を置くことができるのです。神様が招いて下さったから、神様が責任を持って下さるのです。それがキリスト教信仰の恵みです。イエスはレビを召されました。イエスは私達を召して下さいました。そして今日、改めて私達を(あなたを)招かれます。「わたしについて来なさい」(14)。

## 2. キリスト教信仰は赦しの信仰である

ここにもう1つ、キリスト教信仰の恵みのポイントがあります。15節「それから、イエスは、彼の家で食卓に着かれた。取税人や罪人たちも大ぜい、イエスや弟子たちといっしょに食卓に着いていた。こういう人たちが大ぜいいて、イエスに従っていたのである」(15)。レビは、これから仕事を捨ててこの人について行く、その決断を示す思いがあったのでしょうか。何より、他の人が自分に向ける冷たい視線とは違う、暖かな視線を向けてくれる人がいた、仲間にもその人のことを知って欲しかったのではないのでしょうか。それでイエス様を招いて宴会を開きます。そこには取税人や、パリサイ人から「罪人」と呼ばれていた人達が同席していました。聖書の「罪人」は、基本的には「パリサイ人や律法学者の基準に合わない人」のことです。取税人もその仕事の故に「罪人」でした。当時の社会は、90%の貧しい人々と、10%の地主とで成り立っていた社会です。イエスの周りに集まっていた貧しい人々の中には、「罪人」とレッテルを貼られることを覚悟しなければ生きて行けない人もいたのです。それにも拘らず「誰か罪を犯す者はいないか」と見張っていたのがパリ

サイ人であり、律法学者です。彼らは、レビが主催した宴会の様子を見て怒ります。彼らにとって取税人や「罪人」は、遠ざけなければならない存在でした。自分達だけではなくて、宗教家ならば近づきになるはずがない連中だったのです。ところがイエス様は、その彼らと楽しそうに食事をされたのです。それが、彼らには我慢できませんでした。だからイエスの弟子達に言うのです。「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか」(16)。

それに対してイエスは言われます。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」(17)。これは『『正しい人—(神の前に何の罪もない人、霊的な癒しを必要としないような人)』が少しはいる』という意味ではありません。そんな人はいません。そうではなくて「癒される必要を感じなければ、その人は癒しを受け取れない」ということです。レビがイエス様の召しに答え得た理由が、ここに 있습니다。レビは自分の生き方が良いとは思っていませんでした。人々の冷たい眼差しによって「自分が罪人である、神に喜ばれるように生き得ていない」ということは、嫌というほど自覚させられていました。しかし、だからこそ「罪人を招くために来た」と言われるイエス様の招きに答えたのです、応答できたのです。

私達には、人に言えない、聞かせたくない思いがあります。心に様々な傷—(痛みや、悲しみや、情けなさや、悔しさや、恨みや…)、そのようなものを持っているのが私達です。しかしイエス様は言われます。『『自分の心—(生き方)—がどこか病んでいる。心に傷がある。何とかしたいけれどどうにもならない』、そのことを感じている人、そのことに苦しんでいる人、そういう人を招くために、私は来たのだ』。先程の姉妹が、こう言われました。「辛いところを通して来たし、奇麗事だけでは済まされないものがあります、こんな醜いこともあったし、今もあるのです」。私は申し上げました。「その人に言えないような部分、心の傷の部分でイエス様と繋がって下さい。いやその部分でこそ、私達はイエス様と繋がれるのです」。

宗教のリーダー達は、自分を聖く保とうとして頑張り、しかしそれが他の人に対する優越感になり、独善的になり、結果としてイエスの差し出しておられる「癒し(赦し)の恵み」を受け取ることができなかったのです。どんなに頑張っても、神の前に全く喜ばれるように生きることは、私達には—(誰にも)—できないです。三浦綾子さんがこんなことを言っています。「何気なく言う悪口、陰口…その心の中にとぐろを巻いているのは、敵意、ねたみ、憎しみ、優越感…ではないか…だが人の悪口を言ったことのない者はいないだろう。私達は1人残らず罪深いのだ」(三浦綾子)。私の心にも、人を憎む思い、赦せない思い、あるいは妬み、そんなものがとぐろを巻いています。皆様はいかがでしょう。私達にも、自分ではどうしようもない心の罪があるのではないのでしょうか。であれば、神様の基準に合格するようにはとても生きられないのですから、神様と和解し、神様の恵みの御手の中で生き、そして天国の祝福を頂くには、神に赦してもらわなければならないのです。だからこそイエス様は、私達が神の赦しをもらえるように、私達の罪を背負って、十字架に架かって、それを始末して下さいましたのです。

キリスト教は、「神の赦し」を土台とします。だから救いがあるのです。先週も少し紹介しましたが、三浦綾子さんのトラクトは、次のような言葉で終わっています。「今まで、どんなに罪深い生活をして来た人でも、自分勝手な人でも…自分自身に愛想つきた人でも、そのままがいい。罪深いままがいい。聖書にあるとおり、キリストは我々罪人を救うためにこの世に来られたのだ。ああ、私が悪かった、おゆるしくださいと言う人を、神は喜んで迎えようとしておられるのだ。だまされたと思って、あなたもイエス・キリストの神を信じて下さい。全く別の人生があなたの行く手に待っていることを、わたしは断言してはばからないのです」。ご自分が罪の泥沼から引き揚げられた経験を持つ彼女自身の信仰告白だと思います。

しかも、赦されて主の招きに応えたレビはどうなったか。イエスに招かれたレビが、今度はイエスを招いているのです。イエスの「招き」に答えた者は、今度はイエスを招くことができるのです。問題の中に、悩みの中に、途方に暮れる状況の中に、主に来て頂く…いやこの人生そのものに主に来て頂き、祝福して頂くことができるのです。「無実の罪で14年間も旅行先のメルボルンの刑務所に服役しなければならなかった方」の証を読みました。彼は「なぜ私にこんなことが？」という中で聖書と出会い、イエス様と出会います。もちろん大変な日々を過ごします。しかしイエス様を迎えることで、14年を乗り越えて行くのです。そして今「この14年がなければ、私の『我』が砕かれることはなかった。神の愛なんか分からなかった。いや何より自分の人生の本当の姿に気付くこともなく、人生そのものが『有罪』で終わるところだった」、そう言ってその辛い経験を「主に在って意味あるもの」として見ておられるのです。イエス様に来て頂く時、私達のもの見方が変えられます。出来事の意味が変わります。感謝をもって振り返ることができるようになるのです。

いずれにしても、キリスト教信仰は、私の良さに懸かっている。ただ赦されて、神との関係に入ることができる信仰です。私達も過去を赦され、今を赦されて、将来を赦されて、この時があるのです。それこそキリスト教信仰の恵みです。そして、誰でもがその恵みに与ることができるのです。

#### 最後に

今日、キリスト教信仰の恵みについてお話ししました。最後に1つのことをお話しして終わります。レビは、後に「マタイ福音書—(『歴史上、最も多くの人に影響を与えた本』と言われる)」を書くマタイその人です。「マルコ福音書」は「12使徒の1人であるマタイの過去—(かつて取税人であった)—をあまり広めたくない」という配慮からでしょう、「レビ」という昔の名前を用いています。でも当のマタイは、自分の「福音書」の並行個所に「レビ」ではなく「マタイ」という名前を使うのです。(せっかく気を遣ってもらったのに、です)。しかしマタイは「私は、かつて取税人として嫌な思いをしながら生きていた、罪の中に生きていた、しかし、そこで私はイエス様の『癒し(恵み)』を受け取ったのだ。そこでイエス様に会ったのだ」と叫ばずにはいらなかったのではないのでしょうか。だから「私こそ、この取税人なのだ」と書いたのです。それこそ、キリスト教信仰が恵みの信仰であることを、私達に教えてくれる事実ではないのでしょうか。キリスト教は「恵みの信仰」です。招かれ、赦され、神様と生きて行くことができるということ、感謝したいと思えます。